

生そして死の回避 (Evasion of life and death / مراوغة الحياة والموت)

10月7日以降、一瞬にして世界がひっくり返り、上下が逆さまになったかのようです。それはまるで終末の時がやって来たかのようで、誰も何が起きているのか、何が起こるのか、何が起こったのかを理解していないようでした。死が私たちを四方八方から取り囲みます。逃げる場所などありません。頭上にはドローンが飛び、耳にそのブンブンという音を注ぎ込んできます。その音はまるで歯医者ドリルのように全身を貫き、神経を逆撫でし気を狂わせます。それが何日も何カ月も続くのを想像してください。違いは、ドローンの方が音はもっと大きく、もっと知的であることです。服を着ていても裸でも、起きていても眠っていても、通りにいても部屋にいても、撮影することができます。そして、あなたを殺したいと思えば、ミサイルも載せているのです。

2023年10月13日金曜日、私たちは数十万人とともに南へと避難しました。北部が戦争地帯となったからです。私と家族はディール・アル＝バラに向かいました。なぜかわかりませんが、車に乗っているとき、北朝鮮と韓国が頭に浮かびました。なぜ北と南があるのでしょうか。北と南の物語は終わりのない話なのでしょう。

私たちは、この避難が数日だけで終わると思っていました。しかし、気がつけば7カ月が過ぎ、私たちはいまだに毎日、毎時、毎瞬間、戻れる日を夢見ています。初めて、父が私に国のことや帰りたいという絶え間ない想いを語っていたときの痛みの真の意味を理解しました。家というのは、ただの壁や土地ではありません。それは思い出の山々であり、郷愁の平原であり、幼少期や青春時代の記憶の詰まった海です。家とは、心と魂に深く染み込む小さな祖国であり、その詳細を静かに思い出し、いつの間にかその中に溺れてしまう場所なのです。

これが本当に話したいことではありません！ 何度も死の危機を回避し、生き延びる。それはまるでサッカーの巧みなプレーヤーのように死をかわし、命を守ることです。それ自体は素晴らしいことですが、運の問題です。警告もなく突然命を奪われ、爆撃により体がバラバラにされ、瓦礫の下でゆっくりと腐敗し、消えてしまうこともあります。多くの人々が間違った時間、歴史、地理の中で消え、そのことは私たちを停止へと追い込んでいきます。

実際、私はこの世界に疲れ、何度も死を望んだことがあります。しかし、死が自らの存在を侵し、家族を脅かし、すべてを奪おうとする時、その恐怖は別次元のものです。私は最後の瞬間まで、生きるため、家族を守るために戦うつもりです。しかし、空から降り注ぐ無数の「地獄の火」をどうやってかわすことができるのでしょうか？かわすことがたやすいことであれば、数十万人もの人々が死んだり負傷したりすることはなかったでしょう。

市場へ行き、難民キャンプ出身の友人に会うたびに、私はその人に家族や隣人、キャンプの人々の様子を尋ねます。その人はすぐに殉教者、行方不明者、負傷者の名前を列挙し始

めます。その名前を聞くと、キャンプの記憶が蘇り、顔が目の前に浮かびます。その笑顔や声が聞こえてくるようです。「ああ、私の親愛なる友人たち、あなたたちはあまりにも早くこの場所を去ってしまいました。悲しみがキャンプの隅々まで蔓延している今、どうやってこのキャンプが回復するのでしょうか？」

涙が意志に反して流れ始めます……「涙は乾く」と言ったのは誰でしょう？涙は決して乾きません。感情が乾くのです。涙は感情が動かされる限り流れ続けます。それはまるで母乳のように、母親が愛情と慈しみを持ち続けている限り、10歳になった子どもであっても母乳を与え続けることができるように。しかし、母乳と涙の違いは、母乳は子どもを成長させ強くする、一方、涙は悲しみを大きくするということです。感情が尽きることがなければ、一生をかけて涙を流し続けます。誰かがある人を思い出したり、ある出来事が記憶を呼び起こしたりするたびに、涙が再びこぼれるのです。

7カ月間、私の涙は乾いていません。私はすべてが小さく始まり、それがやがて大きくなると思っていました。ただし悲しみを除いて。悲しみは最初から大きく始まり、小さくなっていくと思っていました。しかし、戦争が続き、悲劇が増える中で、悲しみが致命的であることに気づきました。残された人たちを悲しみながら、どれほど多くの母親、父親、兄弟が亡くなったことでしょうか。

「剣で死なない者は、他のもので死ぬ。」

死の原因は様々ですが、死自体は一つです。

私はこれまで、死に備えたことはありませんでした。常に生きるために備えてきました。特に、あと数カ月で60歳を迎え、生涯で初めて休息を取ろうとしていたのです。私の人生は馬に乗り、剣を手に恐怖に立ち向かい続けるもので、一日たりとも休むことはありませんでした。

妻とはエジプト旅行を計画していました。カイロ、アレクサンドリア、ルクソール、アスワン、シャルム・エル・シェイク、そしてエル・アラメインを巡る旅です。戦争が始まる前、毎晩その旅を想像しました。各都市に何日滞在し、旅をどのように進めるか、小さなショルダーバッグだけを持ち、移動を楽にしようと決めていました。子どもたちには、「今回だけは私たちのために時間を使わせてくれ」と繰り返し言い聞かせ、旅行中に何かを買ってほしいと頼まないようお願いしました。そうしないと、彼らの要求を満たすために奔走することになってしまうからです。私たちは言っていました、「この惨めな人生の中で、たった二日間だけでも、私たちが生きて幸せだったと言える時間を作らせてくれ」と。

今、私はまだ死ぬ準備ができていません。家族や友人と共に過ごす多くの夢や幸せな時間がまだあります。死よ、私の元から去れ！私は生きることを主張します！私たちの偉大な詩人、マフムード・ダルウィーシュが言ったように、「この地上には生きるに値するものが

ある」。さらに私はこう付け加えたい、「この空の下には、愛のひとつとき、自由な祖国、一片のパン、そして一口の水で生き延びたいと願う人々がいる」と。

死の亡霊よ、私たちの人生から消え去れ！ これ以上の罪なき魂を奪う必要があるのか！？

誰か、私たちの自由の代償が一体いくらなのか教えてくれないだろうか？それを払って、この苦しみを終わらせるために。75年以上も続くこの抑圧と痛みは、もう十分ではないのか。それとも、私たちはこの地球の他の住民とは異なり、何度も抑圧を飲み込み、終わりのない夜に、朝を迎える夢を見続ける運命にあると言うのか！？

2024年5月8日

アリー・アブー・ヤースィーン

訳 藤田ヒロシ